

傳曰 往者息長足日女命征討新羅國之時用茲兩石挿著御袖之中以爲鎮懷實是  
御袋中矣 所以行人敬拜此石 乃作歌曰

813 かけまくは あやに恐し 足日女 神の命 韓国を 向け平らげ  
て 御心を 鎮めたまふと い取らして 齋ひたまひし 真玉な  
す 二つの石を 世の人に 示したまひて 万世に 言ひ継ぐが  
ねと 海の底 沖つ深江の 海上の 子負の原に 御手づから  
置かしたまひて 神ながら 神さびいます 奇し御魂 今の現に  
尊きろかむ

可既麻久波 阿夜余可斯故斯 多良志比咩 可尾能弥許等 可良久余遠  
武氣多比良宜豆 弥許之呂遠 斯豆迷多麻布等 伊刀良斯豆 伊波比多麻  
比斯 麻多麻奈須 布多都能伊斯乎 世人余 斯咩斯多麻比豆 余呂豆余

余 伊比都具可祢等 和多能曾許 意枳都布可延乃 宇奈可美乃 故布乃  
波良余 美豆可良 意可志多麻比豆 可武奈何良 可武佐備伊麻須 久  
志美多麻 伊麻能遠都豆余 多布刀伎呂可儻

814 天地の共に久しく言ひ継げと此の奇し御魂敷かしけらしも  
右の事伝へ言ふは、那珂郡伊知郷蓑島の人建部牛麻呂是なり

阿米都知能 等母余比佐斯久 伊比都夏等 許能久斯美多麻 志可志家良  
斯母  
右事傳言那珂郡伊知郷蓑島人建部牛麻呂是也

梅花歌三十二首序を并せたり

天平二年正月十三日、帥老の宅に萃まり宴会を申ふ。時に初春の

813 ○かけまくはあやに恐しー口に出して申し  
あげるのはまことに恐れ多いことです。○  
足日女神の命韓国を向け平らげてー神功皇后が新  
羅の国を服従させ平定して。カラクは皇とも  
朝鮮半島南部の加羅の国を指した語であったが、  
のちに半島全体や中国を指すようになった。こ  
では新羅の国。ムケは正しい方向に向かせる意  
の連用形。従わせる。○御心を鎮めたまふと  
ー陣痛をお鎮めにならうと。前句とあわせて、  
羅を平定してお心にするために、の意とし、  
しかしそれでは日記や風土記の伝える出産延期の  
伝承と無関係になるので(全注)、前句を「服従  
させ平定なさった時に」と解し、こを「産の氣  
の胎動を鎮め、出産を延期なさるべく」の意とす  
る説が一般。新大系の「御心を鎮め」は、皇后  
の陣痛の苦しみを「御心」と臍化した表現と理解  
する。この歌は日記や風土記の伝説を前提にして  
いるはずだから「韓国を向け平らげて」と「御心  
(陣痛)を鎮めたまふ」とが時を異にするとは  
自明のこととして読者に了解できたであろう」と  
は「論衡」の例をあげてはいるが、「前掲大谷  
説」によるのであろう。一方「懐」や「御心」に伝  
説に言う陣痛の意味はないものとする解も見ら  
れた(注釈など)。○い取らして齋ひたまひし真  
玉なす二つの石をーお手に取って御祈願なさった  
玉のような二つの石を。イトラシのイは接頭語、  
トラシのト(刀)はト(甲)の仮名。イハトは身  
を清めて祈ること。祈りの内容にあたるのが「  
世の人の示したまひて万世に言ひ継ぐがね」と  
○の中の人がお見せになつて万世まで言ひ継ぐと一  
にと。「言ひ継ぐがね」のガネは、ある事柄を推  
量し希望する意の助詞。○海の底沖つ深江の海上  
の子負の原にー(わたのそこおきつ)深江の里の  
海上の子負の原に。海底の深い所を沖という所か  
らワタソコオキツは深江の序詞。ウナカミは地  
名か。海のほとりの意とも。全注には海辺説を  
提示する。○御手づから置かしたまひてー御自身

の手でお置きなされた。○神ながら神さびいます  
ー神として神々しくおしずまりになつて。カ  
ムナガラカムサビノ三ノ三ノ等。○奇し御魂今の現  
に尊きろかむー霊石不思議な霊石は今眼前にそ  
のままあって尊く思われる。クンは不思議である  
霊妙である意の形容詞。タマは玉であり、魂の意  
をあわせて持つ。ワツツはワツツと同じく現在をあら  
わす名詞。ワツツと訓む説もあるが、原文の  
「豆」は濁音ヅに宛てられているようだ。アフト  
キロカムは濁音は体言や形容詞連体形を承けて助詞カ  
モに統ける接尾語の助詞。カムはカモの方言形か  
。○天地の共に久しく言ひ継げとー天地と共に  
なつて。アマツチノトモニは「天地と共に」  
(一七六)と同義で古い言い方か。大伴旅人の  
「ほととぎす来鳴きとよもす卯の花の共にや来し  
と問はましものを」(一四七二)にも見える。○  
此の奇し御魂敷かしけらしもーこの霊妙不可思議  
の霊石をここに置き、広くお示しなされたらしい。  
シカシは「敷く」に尊敬の助動詞シの付いた形  
。「敷く」は長歌の「置く」よりも広からせる意味  
が強い。そこに置いて広く示すことをあらわすの  
だらう。

○この作品の内容が建部牛麻呂の口頭伝言に負  
うことを言う。山上憶良の注記であろう。また、  
牛麻呂の伝えるものを現在見るような漢文と長歌  
にまとめたのも山上憶良と思われる。牛麻呂の伝  
えるままに石の形状などを記し、「御袖之中」と  
も「以為鎮懐」とも表現したのであつたらう。  
「実足御袋中矣」など割注を加えたのは、記紀風  
土記の記述との相違を明らかにするためである。  
題詞もなく、作者名の記載もないためである。  
は誰の作品か、多くの論議を重ねられてきたが、  
歌の記録に用いられた首假名は憶良作と明記され  
たものとほぼ等しいし、その甲乙両類の区別をも  
つことや、トル(取る)をト(甲)の仮名を取ら  
れていることなどから、牛麻呂の伝言を今見るかた  
ちに記したのは憶良であつたと考えられる(稲岡  
『万葉表記論』)。二 現在の福岡市博多区美野島

令月、氣淑く風和ぐ。梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす。加以、曙の嶺に雲移り、松は羅を掛けて蓋を傾く。夕の岫に霧結び、鳥は穀に封められて林に迷ふ。庭に新蝶舞ひ、空に故雁帰る。是に天を蓋にし、地を坐にし、膝を促け、鶴を飛ばす。言を一室の裏に忘れ、衿を煙霞の外に開き、淡然に自ら放にし、快然に自ら足る。若し翰苑に非ずは、何を以てか情を摠べむ。詩に落梅の篇を紀す。古今それ何ぞ異ならむ。宜しく園梅を賦して、聊かに短詠を成すべし。

梅花歌卅二首并序

天平二年正月十三日 萃于帥老之宅 申宴會也 于時初春令月 氣淑風和  
 梅披鏡前之粉 蘭薰珮後之香 加以曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋 夕岫結霧  
 鳥封穀而迷林 庭舞新蝶 空歸故鴈 於是蓋天坐地 促膝飛鶴 忘言一

室之裏 開衿煙霞之外 淡然自放 快然自足 若非翰苑何以摠情 詩紀落  
 梅之篇 古今夫何異矣 宜賦園梅聊成短詠

- 815 正月立ち春の来らばかくしこそ梅を招きつつ樂しき終へめ 大式紀卿
- 816 梅の花今咲けるごと散り過ぎず我が家の園にありこそぬかも 少弐
- 817 梅の花咲きたる園の青柳はかづらにすべくなりにけらずや 少弐粟田大夫
- 818 春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ 筑前守山上大夫
- 819 世の中は恋繁しゑやかかくしあらば梅の花にもならましものを 豊後守大伴大夫

あたり。三 建部牛麻呂は未詳。  
 四 梅は奈良時代に中国からもたらされ、平城京の街路や貴族の家の庭園などに植えられた。詩歌に詠まれた例では『懐風藻』の葛野王「五言春日鶯梅を詠す」に「素梅素麗を開き、嬌嬌嬌弄ぶ」とあるのなどが古い。梅を主題として同じ時、同じ場所であるほど多岐の、人を主として同じ時、かつて無かったことだらう。五 序文の作者については説が分かれていて、旅人か。六 太陽暦二月八日頃。七 大伴旅人を指す。作者が旅人であれば、老は卑称。八 大宰帥邸は都府樓址北方の字内裏のあたりだった。九 「葦」は「聚也集也」(万象名義)と見え、アツマル意。一〇 宴會を開く。一一 時あたかも初春のよい月で、外気はこころよ風はやわらわしい。一二 梅は鏡の前の白粉のように白い花を咲かせ。三 蘭は匂い袋のような良い香りを漂わせる。二 下げた匂い袋で麝香や香水などを入れた。四 そればかりでなく夜明けの峯に雲がかかり。五 松は雲の羅紗をまとってまるで蓋をさしかけたように見える。六 夕方の山の穴に霧がちちめ。七 鳥は霧のうすものにとじこめられて林の中に。八 穀は羅と同じく上質の絹。八 庭では今年の新しい蝶が舞い、空には去年来た雁が北の国へ帰ってゆくのが見える。九 そこで天がきぬがさとし、大地を席とし、互いに膝を近づけて親しく酒杯をめぐらす。天地の間を逍遥する老荘的な境地をいう。促は「迫也近也」(万象名義)。一〇 部屋の中では言うことばも忘れるほど楽しくなごやかで。一一 心を大自然に向かってゆたりとくつろがせる。一二 淡々と向かってゆたりた思っている。一三 愉快になって満ち足りた思いで。一四 もし文筆によるのでなければ、どうしてこの心中を述べるのができようか。翰苑は文筆の園。據は「舒也」(万象名義)で思いのゆる意。一五 漢詩には落梅の篇というものが見られる。「落梅之篇」は落梅の花を詠んだ詩篇。「梅花落」など多いが、特定の詩を指すわけではない。(辰巳正明ほか)。一六 古も

今も何の異なるどころがあるか。一七 さあ、園の梅を詠み、短い歌を作ることしよう。以下の歌の記録について補注。

815 ○正月立ち春の来らばは正月になり春が来たら。今年のみでなく毎年という気持ちこめて。○かくしこそ梅を招きつつ樂しき終へめこのように梅を賓客として迎えて樂しみのかぎり尽くす。琴歌譜の「新しき年の始めにかくしこそ千年をかねて樂しきをへめ」と少弐既知の正月賀宴の歌を梅花の宴にふさわしく改作したか。ツキは招く意の動詞。底本等「平利」とあるが紀・細の「岐」による。  
 一八 大宰大式は正五位上相当の官。紀卿は誰か未詳だが、従四位下だった紀朝臣男か。  
 816 ○梅の花今咲けるごと散り過ぎず梅の花今咲いてるよ。今咲いてるよ。今も散らずに。眼前の帥邸の梅花を詠え常春をことほぐ気持ちを表す。○我が家の園にありこそぬかもこのままわれらの家の庭にあつてほしいものです。ワガはワガイへの約。「我が家」を帥邸とするか、小野老自身の家とするか説が分かれるが、「親しんで自他を別たない気持(私注)」の表現と解する方がよい。一八・一八・八二。コレは「してくれる意の助動詞」の未然形。ヌカモは希求。  
 一九 大宰少弐小野老。二三二八。大夫は四位・五位の人への尊称。  
 817 ○梅の花咲きたる園の青柳は梅と共の庭の柳を詠える賀歌。○かづらにすべくなりにけらずや一縷にして頭を飾ることができると見事に芽ぶいたではありませんか。かづらは植物の枝やつるを輪状にして頭に載せ飾りとしたもの。  
 二〇 大宰少弐粟田氏の出身者としては粟田比登が該当するか。  
 818 ○春さればまづ咲くやどの梅の花一春になると先ず花のさきかけとして咲くこのやどの梅の花を。梅花は「花魁」と称され春の花の中